

川柳よこぜ

第 2 号



昭和 57 年 10 月

横 瀬 村 公 民 館
横瀬村川柳を楽しむ会

館内用

川柳よこぜ

昭和五十七年十月

横瀬村公民館

横瀬村川柳を楽しむ会

印刷・(有)秩父プリント社

電話 秩父〔22〕二五八〇

発刊によせて

横瀬村長 富

田

孝

川柳を楽しむ会から活動の成果としての第二巻の発刊を聞き、意気盛んな公民館活動に拍手を贈りたいと思います。

会員の皆様が川柳の楽しさの中に溶けこみいよいよ磨きをかけてきた様です。

創刊号が立派に発刊され、その後も引継ぎ横瀬広報で拝読致しておりますが、時折、堅い紙面にユーモアのある表現であったり、するどい世相への風刺であったり、又人生感のにじむ感が作品となり、紙面に恰もスパイスの味わいを与えておられますのは、得難い事であります。

講師の高田先生を始め青木公民館長さん、設楽社教主事さん等に依り公民館活動の中で恵まれた指導者を有しまさに楽しい雰囲気が見えます。

この熱心な会員の皆さまの動きを誘発頂いた先生方の御指導に深甚なる敬意を表したく思います。

この会の活動がこれを機会に更に充実をする事を期待し、ごあいさつと致します。

発刊によせて

教育長 山 中 義 一

文化とは、西ヨーロッパ語で「土地をたがやす」というラテン語が語源で人間の手が加わっていない「自然」に対する語だそうです。

さらに人間の精神や能力や技術が、教育や訓練で洗練された状態を文化と言ひ、人間がつくり出した、洗練された有形無形のをさして言うそうです。従つて文化は他の動物の持たない、人間のみ持つものです。そしてそれは先人から次代へ受けつがれ深められ発展されて行くものです。深化発展された文化を文化が高いと言うのでしよう。

私は横瀬村の文化がますます高く洗練されて来ていることを非常に素晴らしいことで喜ばしいことと思います。川柳も文化の一つであり横瀬村の文化を高くしている要素の一つと言えます。

私は昨年新聞に「川柳よこぜ」創刊号が紹介された折これは面白い是非……とお願ひし横瀬教育委員会からご惠贈いただいて読ませていただきました。その素晴らしい

い、始めて見る村の同好者によつて川柳だけ一冊にまとめられた柳誌に驚かされたのでした。

いまはからずもここ横瀬の教育長に就任し、第二号発行に当り発刊の辞を囑されました。誠に無縁でもなかったようです。まこと、いなものです。

年令を伺いますと皆老年者です。その「川柳を楽しむ会」の皆さんが教育委員会の前の廊下を通じて階段を登つて勉強会場に歩まれる姿が実に嬉嬉として、勿論講師高田先生指導者青木先生の優れた御指導によることではありましようが、会員の皆さんの求めて止まない川柳作りへの意欲のためとも思われるその歩みにさうそう潑刺とした若さを強く感じ強く胸を打たれたのでした。老令何か一般に寂寥を感じるとき意外な若さを感じたのでした。

人生経験豊かな老令者にこそまことに適した勉強であり、会員の皆さんが大いに楽しみ、励み一層豊かな人生を送られ、更に、三号・四号をご期待して第二号発刊を祝い、関係者に感謝しごあいさついたします。

発刊にあたって

公民館長 青 木 由 郎

川柳よこぜ（第二集）が発刊されることになった。

「川柳を楽しむ会」ができたのは、昭和五十五年七月である。今年の八月で満二ヶ年をすぎたところである。はじめは五十一名ではじめたが、だんだん減って現在は三十四名である。毎月中旬に投句を〆切り、月末に句会を開いている。常連がきまり、晴雨にかかわらず、毎月二十四～五名の出席がある。

講師は両神村公民館長高田喜好先生である。投句は課題、自由題各一句である。事前にプリントがすってあるので、出席すると各八句づつよいと思う句を選び出す。

会員は真剣で声一つたてず選句に没頭している。終わると、採点係二名が大きな声で読みあげながら、採点表に記入する。会員の採点結果をいろいろ話合ったあとで、講師の採点と指導がある。作品は毎月広報に掲載するので、村民にも大変評判がよい。秋の文化祭には一人二句を短冊に書いて展示する。また「川柳よこぜ」に作品があるので楽しみである。一人で数十冊も注文して、親類

縁者に配る人もいるが、これはよいお土産になる。

五十五年初期の作品「会長は若いとみんなにおだてられ」「理解ある姑は何時も本を読み」「はげ頭残り三本大事にし」「御中元まわしてうめる嫁のうで」「腰のばし昔なじみと盆おどり」にはじまった作品が、

五十六年にはいると、「混浴にてれる若さがまだ残り」「駄賃だけ肩をたたいて孫は逃げ」「長生きの秘訣はこれと徳利撫で」「長閑な日電気ごたつを解雇する」「結論を待てずに酒になる会議」と発展した。

五十七年になると、「知らぬ間に二号の家をボチが知り」「おしゃべりがすぎて目標それて行き」「唇のさむさを知って貝となる」「蕎麦までが舶来だとはつゆしらず」「鈍才も秀才になる披露宴」「進歩した人間ロボット人を喰い」に発展した。

(57・9・1)

あいさつ

川柳を楽しむ会長 若 林 佐 市

世界的に長寿者が増え、特に日本はそのナンバーワンとなり、これから高齢化社会へ突入するという今日、我々老人は何を生きがいに老後を送るかということが頭の中をかけめぐっています。お互いが気楽気儘にユーモアのある話し合える機会がほしいと思います。

川柳を楽しむ会もこのような主旨から計画され、講座が開かれて約二年が経過いたしました。幸いに二十数名の方々が毎月一回の例会を何ともの楽しみに出席して、高田先生のご指導を受けて、皆上達したとほめられ、お世辞にせよニコニコ喜び勇んでいます。

出席者は六十才以上の方が大部分で、爺さん婆さん入り乱れての句作は、誠に和気あいあい楽しい講座であります。昨年満一ヶ年を記念して青木館長、設楽先生のお骨折りで「川柳よこぜ」の創刊号が出版され、同好者の喝采を博しました。

また、今回第二号が出版されることは喜ばしいことで

あります。老人ボケを防ぎ、頭の働きをよくして、世の中を批判し、時事の事柄から性教育の問題等ユーモアあふれる句作は、今や生きがいになっております。

長年の豊かな人間生活体験を掘り起しての結果がここに表現されるということになり、川柳としての質やその良し悪しは別として、一同更に一層若返って精進したいと思えます。

川柳よこぜの第二号出版にあたり会員皆様のご多幸をお祈りしてごあいさついたします。

昭和五十七年九月

祝 出 版

選 者 高 田 喜 好

川柳よこぜ第二号出版おめでとう存じます。

早いもので当地老人クラブによる「川柳を楽しむ会」

が発足してより三年目となりました。石の上にも三年、

という諺どおり、川柳に親しみ、掘り下げた成果が、

この第二集の中に燦然と光を放っております。ことほど

左様に、横瀬村の川柳熱は、老人クラブの若林会長さん

のリード宜しきを得て、会員の協力態勢が整い、好まし

い団結が月々の例会研究を継続させています。その縁の

下には青木公民館長、設楽主事さんらの力も見逃せませ

ん。

一方村の行政機関も、秩父の文化村を目ざしてのリー

ダーシップを根付かせているため、この振興が見られる

のだと思います。恵まれた土壌に芽生えた「川柳よこぜ」、

の成長を、衷心より祝福申し上げたいと存じます。

秩父にはもともと、短歌・俳句等短文芸の土壌は、よ

く馴らされていて、有名・無名の歌人・俳人の人口はか

なりの数があると推測しますが、こと川柳に関しては、

この盆地は不毛に近い状態であったように思われます。

わたしの見聞の範囲では幕末明治にかけての月並俳諧

や、狂歌体のへなぶり（夷曲・鄙振とも）などの中に、

川柳的の笑いや諷刺などを利かせた風潮はあったよう

です。昭和期に入って、十年前後の数年間、現秩父市の松

本いね氏ほか数名の方々による柳誌「雞の耳」の発行が

なされたくらいで、短歌・俳句のような結社が持たれた

こと、組織的な川柳活動らしいものは、寡聞にして知り

ません。それ故にこそ、この横瀬の「川柳を楽しむ会」

あたりが中軸となって、秩父地方に「秩父の川柳ここ

あり——」の一大旗幟を掲げていただきたい願いが切

るわけなのです。そして、三年間の「川柳を楽しむ集り」

が原点となって、地方文化を向上させる基盤造りとな

っていたきたい。そうしたこと、後生たちがその功を

賛える所以にもなるのです。

そうなれば、川柳を楽しむ会員としても、「楽しみ」

が時には“苦しみ”に変わることも覚悟しなければならぬ
と思います。元来“苦あれば楽あり”で、苦楽は表裏一
体のものです。苦しみの伴わない楽しみは存在しないと
考えて、お互いが奮い励ましあって、勉強して行くこと
を特にお願ひします。その勉強の手引きとして少々申し
上げておきます。

会員の方々は、一応基礎的知識をもっておいでの方々
ですから、これからは

一、何を訴えよう（言おう）としているのかを、頭の中
でよく見定めて

二、どんな手段（表現）で、言おうか

を、自分で検討してみることが大切です。そしてその表
現を工夫するのに、多作・多読は、言うまでもなく、作
品を友達や先輩（先生）によく見て貰い、謙虚に反省し
てみるのが肝要と存じます。

このことは、すべての文章表現、特に定型短詩形のも
の勉強には大切な要件だろうと思います。

次に定型川柳のリズム感についてだけ略記してみまし
よう。

山村祐氏（現代川柳論）によると

川柳（俳句も）の一行詩としての基本的性格の中に、
“一呼吸の詩形”ということを書いて居られます。

① サミダレノフリノコシテヤヒカリドウ（芭蕉）

② サミダレノフリノコシテヤ〇〇 ヒカリドウ

①は休まないで棒読み

②は、休止感（間）を〇印のところにおいて読む。

①と②ではリズム感が全然違う。日本語の間の取り方
の重要性がわかります。しかし、間の取り方で、俳句と
川柳とは少し違います。俳句の切字の間は、川柳の間よ
より長い。川柳は休止の間は大体一音節なので、五・七
調か七・五調かは複合的に秘められています。

1拍	2	3	1拍	2	3	4	1拍	2	3
コ	シ	オ	ビ	ヲ	〇	シ	メ	ル	ト
コ	シ	ハ	〇	イ	キ	テ	ク	ル	〇

三拍 四拍 三拍

私たちは五・七・五音を読むとき、無意識の中に、三
・四・三拍に読んでいます。つまり二音を一拍に読みま
す。

と、こんな風に述べておられます。日本語の間のとり

方——、この呼吸法を、もう一度考え直して実作してみ
て下さい。

尤も現代川柳の中には非定型の新川柳もありますので、
柳誌“さいたま”等によって勉強してみして下さい。以下
川柳のいくつかを——。

○デート炎日とかげをベットに蛇をベットに

○私の影よそんなに夢中で鯛を食うなよ

○コインロッカー私の掌をかくす

○菜の花菜の花子供でも産もうかな

(以上“新川柳への招待”)

○すべて子に賭けると肋痛み出す

○七生流転切っ先細き母なりし

○形だけ夫婦は擬宝珠が光り

○雨は饒舌に靴下を編んでいる

(以上“さいたま”)

先は以上、お祝いの詞まで——。

草矢

高田きよし

川沿いの朝市泳ぐ宿浴衣

風鈴の音が乾いて孫帰京

唇に春をこぼして齒が白い

秋空に草矢が飛んで突きささる

野仏の膝に一円積む願い

隣から柚子が冬至を連れて来る

さらさらと夢をこぼして砂遊び

清濁を併せて吞んでシヨッ引かれ

鵜のまねをしても溺れぬ川鵜

偉くない証拠敬称つけられる

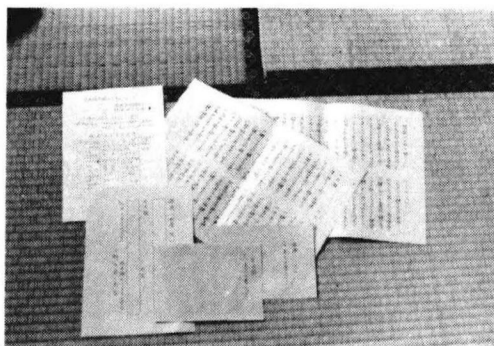
川柳を楽しむ会風景



▲ 講師の高田先生(左)・若林会長(右)



▲ 勢揃いした川柳子ほか



▲ 毎回だされる資料



▲ 係の読みあげる声も
力強く……。

暁の星

浅見勘三

立春を我が世の春と猫の恋

片言を囲んで笑う嫁姑

夜おそく間違ひ電話腹が立つ

木枯しの冬と寒さの二人連れ

茶柱がほんとに立ってよい噂

舞うほどについ誘われて流行歌

信州の味と比べる秩父そば

菊花展支柱に光る金と銀

盃の中に映して見る笑顔

寒い夜犬の遠吠えたぬき汗

進歩する世にも地獄はまだあった

もう咲いた寒の半ばに福寿草

暴風雨

新井さみ

暴風雨野菜全滅又値上げ

年老いてテレビ体操楽しみに

じいさんと別れて暮らすその思い

朝六時ニュース聞くのがおたのしみ

美容院嫁も姑もわからない

札幌でビールジョッキに困りはて

楽しみに蒔いて収穫手打ちそば

満開のさつきが夏を呼んでいる

拒否の子も高校通い進歩かな

悔いらないほど手を尽したが姉は墓

比叡山びわ湖眺めつ猿の群れ

台所嫁がやりくり思いやり

草

餅

石川 健吾

骸骨も粧えば美人コンテスト

キセルの先はづして降りる無人駅

防衛費増やし核の未来を近くする

先祖のお蔭で土地に金がなり

親不幸競輪競馬をなり立たせ

五百円ついに小銭の仲間入り

予感などあてにするから腹が立ち

逆らえば反抗期だと親馬鹿で

気取って値上げ草餅よお前まで

にぎやかに故人さかなに飲む法事

唇のさむさを知って貝になる

さじなめて童たのしい搔き氷

手打ちそば

井上フキ

誉められて土産に持たす手打ちそば

ひよどりがびわの熟れたを先に知り

留守番も仕事のうちと世辞を言い

長話やかんぴいぴい台所

湯あがりにシャツ一枚で長電話

愛妻もボールうつ日は敵味方

親と子が間違えられる電話口

御先祖が植えた苗木を孫がきり

初孫にじじと呼ばれたてれ笑い

嬉しさと淋しさ喜寿の祝いかな

風鈴と炬燵はいつもすれちがい

七夕に無理な願いをそつと書き

ワンちゃん

大野 竹治郎

ワンちゃんはことしいっぱい王様だ

連休にあれもこれもと金がなし

双生児また間違えて叱られる

賽銭をはずみ一家の無事願ひ

父さんのエッチな歌に皆笑ひ

小供たち親にさからう年になる

この着物この帯しめて初まいり

神仏にとなり近所に事なきと

熱病になくはならぬ氷なり

盃を受けてうれしい人といふ

武甲山たからの山を掘り削り

小供たち泣きべそかいてお留守ばん

赤字国鉄

風間忠作

国鉄さん赤字赤字でヤミ休暇

頂上で樹氷がひらく大舞台

内閣も予算やりくり御手のもの

おしゃべりはどこまで行っても永つちり

御先祖は人間づらしたおさるさん

米ソにて核戦争の予感あり

逆らつて時にはハッスル若い気で

新嫁が台所で見たゴキブリゾク

盃をコップに代えて好い気嫌

ゴハンよりラーメン好きで給食児

戌の年

加藤 栄

新春に添える県花はサッカー戦

猟犬も我が代の春とうかれ出し

適齢期選り好みせずチャンス待つ

古ぼけた先祖の石に苔が生え

カラオケで間違う歌詞へ大拍手

ガス漏れか嫁笑ってる台所

春闘も賃金上がりスト回避

寿命延び悩む社会も高齢化

逆らって満場沸かしもの笑い

来客に嫁を自慢に手打ち蕎麦

盃を持つ手が震え口が先

高座からしゃべるうまさの人気とり